

伝承遊び研究考(5)

——瀬田貞二の遊戯分類説を中心に——

大 森 隆 子*

A Study of Traditional Games (5)

—Centering on Seta's Theory of Classification System of Games—

Takako ŌMORI

はじめに

筆者は、前稿¹⁾において「伝承遊び」を分類という視点から検討した。それは、「伝承遊び」をテーマとした研究の一環で行った伝承遊び論に関する考察過程で、各論者が構想した伝承遊びの分類体系に着目したことによる。同論考の冒頭で、筆者は「各氏は伝承遊びの記録や集約・紹介にあたって、自身の『伝承遊び』論を踏まえたそれぞれの分類型を設定し、具体的な遊び群を種別化した上で発表した²⁾と指摘した。こうした分類型や種別例の検証は、筆者が構想する「伝承遊び」の構造化や体系化に向けての先行例として、集積する必要性を認めたのである。この着想に立ち、1960年代から1980年代にかけて（この時期、「伝承遊び」の行く末を案じて有識者の関心が高まった）の4例（町田嘉章・浅野健二共著『わらべうた』、上笠一郎『日本のわらべ唄』、尾原昭夫『日本のわらべ歌』、小泉文夫『わらべうたの研究』）とそれらの基となる1例（北原白秋『日本伝承童謡集成』）——いずれもわらべうたに的を絞ったものであるが——の分類型を比較・検証した。その結果を、「分類という作業は、一つひとつの小さな、具体的な詩句や遊びを仕分けていくという実に丹念な細かい、しかも根気を要する労作である。しかしそれは全貌を視界に捉えるという大きな成果に繋がっているのも事実である。すなわち伝承遊びの構想や構造化に欠くべからざるものといえよう³⁾と報告した。

ところで、日本の遊戯研究者の一人である中田幸平は、伝承遊びの収集例の特徴について次のように発言している。

子供の遊戯を収集し、分類記述された本は古くから数多く刊行されているが、その大半は歌詞や曲節を主としたもので、遊び動作を記述したものは意外に少ない。まして男の子の遊びは体戯が多く、歌詞もなく、したがって曲節もないことから、記述されても表面的な解説におわっているのが通例であった。これでは、その歌詞や体戯の発

* 教育学部 子ども発達学科

生源である風土や遊び動作をなおざりにして、本来の子供遊戯の実体を捉えたとはいえない難しいものだった。⁴⁾

同時期に児童文学者の瀬田貞二は、大田才次郎編『日本全国児童遊戯法』の復刊に際して以下の見解を述べている。

この本は、見られるとおり、子どもの遊びの種々を記載したものであるが、遊戯法を記述した本というものは、じつは意外に数が少ない。遊戯の類縁である、あるいはその一部である童唄については、曲節は別として、その歌詞をあげつらねたものが、古くからかなり多くみられるのにくらべて、それに伴って動作する方の遊び方を書き留めた本は古来まれである。思うに、詞章は文字に移しやすく、動作はその煩にたえないことが主な原因であろうが、それ以上にむかしの人々は、日常触目する子どもたちの遊びを文字どおり児戯として、とりあげる意義を見出さなかったためであろう。⁵⁾

両者は、わが国の伝承遊び研究が歌詞や詞句を伴う遊びに偏して進められてきたことを指摘している。こうした傾向は、筆者自身も感じてきたことである。にもかかわらず伝承遊び全体から見ればその一部に過ぎない「わらべうた遊び」に焦点を絞ってきた心底には、残された記録が少ない、しかし膨大な種例を抱含する伝承遊び全体の世界に入ることへの躊躇があった。しかしながら、前稿で用いた分類という視点を導入することで、歩を進めることができるのではと考え、今回はわらべうた遊びを含む伝承遊び全体という新たな視界を見据え、改めて分類という視点を基軸に考察したい。

本稿では、この分野における先行研究例として瀬田貞二⁶⁾の説を中心に検討する(1)。次に瀬田の論考の契機となった『日本全国児童遊戯法』と、同書において氏が特に名指しした3著(小高吉三郎『日本の遊戯』、酒井欣『童戯』、前田勇『児童叢考』)を取り上げる(2)。それらを通して、伝承遊び全体の体系構築の一助としたい。

1 瀬田貞二の説

(1) 遊戯の分類考

瀬田は前述した『日本児童遊戯集』の解説で、遊戯もしくは遊戯集について、分類を基軸に置いた考察を試みている。その1は遊戯集団を時空間の軸で区切ったことで、それまでの江戸を中心として開花・発展したわが国固有の伝承遊び群と、明治以降諸外国から移入された新しい遊戯群を区別した。その2は個々の遊戯集の検討に当たり、具体的遊び事例がどのような分類型の下に配置されているかを精査したことである。その際、それらの基幹を成す論や思想を、①江戸考証学を礎としたもの、②西欧の遊戯紹介を目的に利便的に考案されたもの、③柳田民俗学の思想に基づくものの3つとし、その視線も絡めて論じている。

そもそも氏が遊戯集団の分別を思考するに至った史的背景が、以下の叙述を通して浮かび上がる。

この書は、子どもの遊戯を、はじめてといわぬまでも、もっとも本格的に意識的に記述伝達したものであると思われる。ただし、この書のはしがきによって知られるように、その目的は必ずしも学問的ではなく、多分に实际的であって、あたかも祖父母か叔伯が直接に子どもたちに彼らの遊戯世界を豊かにすべく、伝承的な遊びの数々を

教えるもののような態度がうかがわれる。そして編者らをしてこの遊戯法をもとめさせたものは、「今や児童は、従来の遊戯に倦み、珍奇の方法を知らんと欲して、海外人の遊戯法まで模倣せんとするに至れるの際なれば」——日本中にはまだまだよい遊び方があることを示して「各地特殊の遊戯にして一般に行はれざるものを集めんには、児童の助けとならんこと、蓋し少しとせず、これ本書の所以なり。」⁷⁾

要するに、氏は、明治維新後異国の遊戯が流入される世になって、これまで身近なところで継承されてきた遊び、すなわち『日本全国児童遊戯法』に収録されたような遊戯群を、日本の伝承遊びとして規定化した。というのは、「二十年代にはいつて、子どもの遊びは、大きく転回しつつある遊戯の語義に包摂せられて、変化していった」⁸⁾と述べているように、当時、近代的教育制度が確立する中で、学校教育の内容（「体育」他）にふさわしいとされる諸外国の遊戯・ゲームなどの新しい遊戯群が積極的に奨励され、従来の遊びに取って代わられる、また抱合される状況が進行していたことを相対化してのことである。

(2) 具体的な遊戯の分類例

前述した瀬田の遊戯集団の分別認識、分類項目への視座、加えて土台を成す3つの論を踏まえつつ、氏が着目した遊戯書とその分類例を順次紹介する。前節で紹介した西欧の遊戯書に属するものの分類例については二書を挙げている。その一は、『内外遊戯全書』シリーズの第十一編「室内遊戯法」（博文館、明治33年）で、

目次を一瞥すれば（中略）『一 剣舞、二 歌曲、三 楽器遊び、四 カルタ遊び、五 学術遊び、六 室内雑遊戯、七 車座遊戯』というので、六の室内遊戯は『飛越石取り遊び、読み取り遊び、歌合せ、石送り、碁石遊び、陣立将棋、陣立むさし、滑稽影人形、室内早速新聞遊び、』また七の車座遊戯は、『逆語、雷、電信、旅行、無声の学校』と、その題名が自ら新旧あれこれのかき集めを露呈している。⁹⁾

とある。その二は、松浦政泰訳編『世界遊戯大全』（博文館、明治40年）で、

単独遊戯（手製玩具、考案遊戯、学術遊戯）、双対遊戯（室内遊戯、途上観察遊戯）、団樂遊戯（組分け法、学芸競争、紙牌遊戯、静座競争、活動競争）、団体遊戯（祝会遊戯、夜会遊戯、義捐会）、余興遊戯（室の装飾、手品、座敷狂言、活人画、造り物、福引）に細分類している点にも工夫があった。日本のものには、折紙から知恵の板、文字絵、雙六、碁将棋、くじ福引き、カルタなどをとりいれてある。¹⁰⁾

とある。この二例をみると、分類項目は遊びの内容、場、人数、形体などの面から立てられている。これについて氏は、項目自体の適否はともかく、まず大項目を置き、それぞれに小項目を立てるといった、分類型の初歩的な構築、すなわち構造化への志向性を持つ点に関して評価を与えている。

第2に江戸考証学を基盤として著されたとする遊戯書については、幾種かの遊戯集（『尾張童謡集』小寺玉晃他）を紹介しつつも、分類例に関しては平出鏗二郎の『東京風俗史』一書を取り上げて、以下のように触れているに留まる。

ほぼ四十にわたる遊戯法は、はじめて分類をほどこされ、遊戯が、男女の別、季節、人数、年齢、場所などによって変わることが、平出の序に一応ふれられたことは注意していいだろう。¹¹⁾

ここでは、分類基準に男女の別、季節の違い、人数の多少、年齢の別や遊び場所など、日本の伝承遊びの特徴を捉えた視点が示されている。

第3に柳田民俗学の思想に基づく分類項目としては、大正から昭和前期にかけて構想された柳田国男による語彙の分類例に言及している。柳田は『分類児童語彙』¹²⁾において、児童が言葉を習得する道筋を次のように区分けした。上巻において「幼な言葉」、「耳言葉」、「遊ばせうた」、「軒遊び」、下巻として準備していた書において「外遊び」、「辻わざ」、「鬼ごと」、「児童演技」、「児童社交」、「命名技術」の合わせて10項目である。

これに対し瀬田は次のように解説している。

そこから示唆されることの一つは、子どもの発達による遊戯の発展の問題である。まず物の名づけや呼び方に表われるいちばん幼い子どものくらしをとらえて、幼な言葉とし、次に耳言葉という耳なれない分類を与えて、母親が子どもと遊ぶ時の最初の幼な遊びをくりひろげ、やがて口遊びと手遊び、軒遊びとしだいに広がってゆく子どもの成長に即応した遊戯の相を位づけようとする。「語彙」に表れた方法論はここまでは、外遊びは、庭遊びと辻わざにわけられ、さらに問答体の団体遊戯である「かごめかごめ」などの問答遊びをすえて、子どもの遊び全体を総括しようとしたのである。¹³⁾

すなわち、瀬田は柳田が提起した語彙の発達過程が子どもの遊戯の発達段階——母子から友達へ、単純から複雑へ、家の中から屋外へ、軒先から広場へ、口遊び・手遊びから問答遊びへ——をベースに構想していることに、柳田民俗学の特徴を看取している。そうした点から、氏を遊戯の分類型提案者の一人として位置付けた。しかしながら瀬田は柳田が江戸の考証学を取り込まなかったことを惜しんでいる。それは、「いうならば、柳田学のヨコ糸に、それを裏づける理論をもって考証学のタテ糸を補強せしめよ、両者はかんけいなく並存するものではない、というのが私の見方である」¹⁴⁾という文言に表現されている。瀬田は、それらを実現した遊戯書として、小高吉三郎著『日本の遊戯』、酒井欣著『童戯』、前田勇著『児戯叢考』の3著を挙げた。したがって伝承遊びの世界を体系的に把握するには、これらを検証するよう語っていると受け止める。

2 児童遊戯に関する分類型の検討

(1) 大田才次郎編『日本全国児童遊戯法』について

この書は、そもそも瀬田がこのテーマを展開する基点となったものである。明治になり、江戸から引き継いだ子どもの伝承遊びの収集書の類は、地域ごとにまとめられた幾種かはみられるが、全国を網羅したものは少ない。そういう意味で、後者の代表書の一つに挙げられるのが、1901（明治34）年に発刊された『日本全国児童遊戯法』である。そもその出版動機については、以下のように記している。

紙鳶揚げをしましょうか、「イヤモウ厭きました、（中略）「ソレじゃあベースボールは、「ソレは好いのですが、何ぞ未だ日本の遊びで面白いのがあるいなものですね、（中略）誰に聞いたら分かりましょう、ムー好い事がある、アノ博文館、あそこへ頼んで、日本全国の遊びを集めて貰いましょう。

是非にと或る少年から頼まれたので、成程面白い事だ、遣って見ましよう、早速全

国各地へ書面を飛ばして、(中略)それはそれはめずらしい、面白い、異った遊びが
タント聚まりましたが、骨折りもまた格別で、成功するまでに丁度半年余りかかりま
した。¹⁵⁾

このようにして全国より収集した遊び例の編集方針は、以下の指針に提示されている。

- 一 近来児童の研究頻りに起り、童謡を調査するもの、遊戯を調査するもの、玩具を
調査するもの等、種々の方面よりしてこれが研究に従事しつつあれども、本書は必
ずしもこれらの目的を立てて編纂せるものに非ず。(以下略)
- 一 遊戯には室内に属するもの、室外に属するもの、及び男女によりて区別あり。そ
は各方面によりて一見知るを得べければ、本書は一々これが区別を為さざるなり。
- 一 遊戯の古来伝わるものには、或いは卑猥に流るもの、或いは賭博に類するもの
等往々これあり、これ固より善事に非ず。故に本書は善行して害なきものを択びて
これを挙げ、余は悉く除き去ることとせり。
- 一 本書を編纂するにその順序は国別に従い、ただ東京、京都、大阪のみは特にこれ
を巻首に置けり。¹⁶⁾

すなわち、遊戯には室の内外、男女、教育上の適否、地域性など、幾種かの区分がある
ことを指摘しつつもここでは区別せず、教育上適切なものに絞って選択し、それらを地域別
に並べるという構成法を採る。地域の分類区分は、瀬田の紹介文(復刻の原本)を引くと、
上巻は「東京、大坂、三都遊戯」、明治三十四年二月、中巻は、「東海道、東山道 地
方遊戯」同年三月、下巻は「五畿内、外各道 地方遊戯」、同年同月の博文館刊行で
ある。¹⁷⁾

とある。事例数は東京が183と圧倒的に多く、全体数623の約3分の1近くを占める。こ
の他、地域の偏りや採集数のバラつきが目立つ。

(2) 小高吉三郎『日本の遊戯』について

小高¹⁸⁾は、江戸の考証学を中心に、奈良・平安時代以降の文献検証を経て701の遊戯例
を本書¹⁹⁾に掲載した。その動機を以下のように語っている。

それは由緒の深い打毬や蹴鞠が、折角行はれても、その長い歴史やその遊事方法な
どが、全然知られていないために、唯感嘆詞だけの連発であって、有意義であるべき
この古代の遊戯が、全く無意義に終わってしまったらしいと、友人からきかされたか
らだった。(中略)

今われわれは、曾て祖先が理想としていたところの、新東亜建設の偉業に向かっ
て、その歩を進めつつあるではないか、假令それが古聖賢の言でなくつても、温故知
新の一句は、正に金言であることを痛感する。²⁰⁾

ここには、当時の時世が色濃く反映されている。その編集方針については、同書の凡例
のところで、

- 一、本書は時代を追うて、純然たる遊戯史とする考へだつたが、いろいろな点から不
便を感じる場合や、不親切に終る場合が多いので、思い切つて五十音別に排列し
て、一種の辞典の形式をとることにした。(後略)²¹⁾

と述べているように、「あ」の部から五十音順に「ゐ」の部まで40の項目立てをしている。
その上で、「あ」の部にはあがりこさがりこ、あげだま、あげばねなど16の遊戯が、「い」

の部にはいかど、いかのぼり、いくさあそびなど22があげられている。

(3) 酒井欣『童戯』について

酒井²²⁾は、この書²³⁾の序説で子どもの遊戯観を開陳している。一部引用すると、
健全なる子供は国の宝であり、国家の礎石でもある。

いまほど私たちは痛切にこの詞を味つたことはない。将来、大東亜建設の先頭に立つて、諸民族を指導してゆかねばならない日本国民のことを想ふ時、私たちは、まづ現代の子供の錬成に留意しなければならない。

健全なる肉体の上にのみ、健全なる精神は宿る——。この意味からすれば、私たちはどうしても子供を健全に育てあげなければならない。それには、如何なる方法と手段をもつてすればよいか？といふに、子供の健康は、子供の“あそび”を切り離しては考へられない。²⁴⁾

とあり、第二次世界大戦の最中という時代を背負った考えであることが分かる。

本書の構成は、第一篇の錬成遊戯と第二篇の知能遊戯に区分される。前者は鬼ごと、走競、輪型遊戯と行動遊戯、ちんちんもんがら・兎跳び、戦ごっこ、印地・ファグファグト・打瓦、毬杖と振々、はい馬、竹馬、雀小弓・破魔弓、鞆、縄跳び・籠廻し・石蹴り・国取り、スー・ハイナ・キャット・撃壤・琢釘・ネッキ、積木あそび、綾取り、石弾き、踢毬・羽根撞き、擲石・手玉・シャガーナードム、手鞠突きと手鞠唄、自然と遊戯、人形あそび、投扇興、紙鳶揚げ、独楽あそび、水泳、相撲の26項目が、後者はレクトンメキと打木四、絵雙六、十六むさし、謎々、数学あそび、蔵鉤、文字鎖・火廻し・尻取、偏突・文字合・文字絵、貝合せ・歌貝・骨牌の9項目が立てられている。さらに、例えば第一篇錬成遊戯の鬼ごとには、子をとろ子とろ、宿鬼、黒ン坊遊び、宿無し鬼、打鬼戯、猫と鼠、後ン坊、目隠し鬼、跼み鬼、影踏み鬼、隠れんぼう、タルバカの具体的遊び例12が挙げられている。

錬成遊戯と知能遊戯という分類は教育・訓練的色彩が強く、そのためか、諸外国からの遊戯例や学校の教科目に関わる例がみられるのが特徴的である。

(4) 前田勇『児童叢考』について

前田²⁵⁾は、この書²⁶⁾の序において児戯について以下のように述べている。

児戯といふ語は普通、価値なきしわざの意に用いられている。ところが安ぞ知らん児戯こそ全く伝統そのものであった。山東京伝は骨董集の中で繰り返し繰り返しはかなき児戯の思ひもよらず源遠きに驚いている。しかし私の驚きが、どうしてそれに劣ろう。(中略)

埒もなきしわざのかへ名に呼ばれつつ、此の世に誰か一人でも児戯に慰められず、児戯に育てられなかった者があろうか。しかも自分を育てて呉れ慰めて呉れたその児戯は、自分の父母をも、父母の父母をも、何代か前の幾世か昔の父母をも慰め育てたものではなかつたか。この児戯一つに同胞の、祖先の、血が貫流している。(中略) もっともっとしらべて、この胸一つに包み切れない驚異と詠歎をうたい上げ、価値なきしわざどころか児戯こそ価値そのものなる事を、人々に訴へたいと思ふばかりである。²⁷⁾

時局柄なのであろう、先祖を共通に持つ同胞意識の高揚感が伝来の児戯に向かったように受け止められる。構成についてみると、草木篇、禽蟲篇、生活篇、躰技篇の4区分である。それぞれに、具体的遊びが列記されている。草木篇には「堇」他28例が、禽蟲篇には「蛙」他5例が、生活篇には「ままごと」他3例が、躰技篇には雪達磨他15例が紹介されている。4区分の最初が草木篇で、しかも1編の冒頭、堇の項目の具体的遊び例はすみれ摘み、つぼすみれと続く。二編の蛙の項目の具体例は蛙釣り、蛙の弔いと続く。三編は照乞雑考、ままごとと項目が置かれ、四編は雪達磨、氷滑りと項目が設定されている。このように、それぞれの項目ごとに古よりの素朴な遊びが連なっている。

まとめに代えて

瀬田貞二の、分類を視点とした遊戯考に着目して氏の考えを探り、氏が指摘した遊戯書3点（小高吉三郎『日本の遊戯』、酒井欣『童戯』、前田勇『児童叢考』）を中心に検証した。その結果、西欧からの遊戯移入を機に、改めてわが国固有の遊びが遊戯の集合体の一つとして認識されたことが明らかになった。

対象とした3著の検討からは共通性と相違性が見られた。前者に関しては、ともに昭和18・19年という第二次世界大戦末期に日本の伝統的遊びを対象として作成されたもので、出版動機にはいずれも国民意識の高揚といった思潮が記されていた。遊戯の紹介が古典資料等の検証を中心とした考証学の方法により詳細に記述されていたことも共通事項である。

一方で分類の視点からみると相違が目立つ。『日本全国児童遊戯法』においては、採集地ごとに列挙されていた遊び例の配置が、『日本の遊戯』では五十音順による辞典仕様の構成、『童戯』では二篇（錬成遊戯、知能遊戯）構成、『児童叢考』は四篇（草木、禽蟲、生活、躰技）構成であった。後の2書はそれぞれに下位項目が2段構えで設定されており、遊戯体系構築の土台を形成した一つと考えられる。体系の錬成という面からみれば、いずれも未熟で、複雑な構成には至っていない。項目名称においても相互間に有機的関係性がみられない。

全体を通してみると、江戸から明治の世になり、子どもの遊戯が巷の子らの自然的所産から海外からの輸入ものも含め教育・訓育に資する人為的所産に変化を遂げたこと、それを機に子どもの伝承的な遊びが省みられ記録に残される仕儀になったこと、さらに時を経て昭和の世・第二次世界大戦下では、わが国独自の伝承遊びが日本人の精神的支柱の一つとして脚光を浴びたことなどが明らかになった。いずれも諸外国とわが国の関係性の渦中で、日本の伝統的遊びについての思考が深化したものといえよう。

今回の検証作業からは、当初目的とした遊戯体系の構想化に大きく資する結果は得られなかったが、遊戯概念の基本に関わる事項とその思想について深く考えさせられる契機となった。今後も継続して伝承遊びについて思考してゆきたい。

注

- 1) 大森隆子「伝承遊び研究考(4)——『伝承遊び』の分類について」(『椋山女学園大学研究論

- 集』第42号 人文科学篇，2011年所収）。
- 2) 同上, p. 11。
 - 3) 同上, p. 19。
 - 4) 中田幸平『日本の児童遊戯』社会思想社，1970年。
 - 5) 『日本児童遊戯集——大田才次郎編，瀬田貞二解説』平凡社，1968年（明治34年，博文館刊行『日本全国児童遊戯法』全三巻の復刻）p. 347。
 - 6) 1916（大正5）年東京に生まれる。東大国文科卒業。児童文学研究者，童話作家，絵本の翻訳など児童文化全般に渡り活躍する。1979（昭和54）年没。（『朝日人物事典』朝日新聞社，1990年，並びに『講談社日本人名大辞典』講談社，2001年より）
 - 7) 同上, pp. 347-348。
 - 8) 同上, p. 351。
 - 9) 同上, p. 352。
 - 10) 同上, p. 353。
 - 11) 同上, p. 358。
 - 12) 柳田国男『分類児童語彙』上巻，東京堂，1949年。
 - 13) 前掲『日本児童遊戯集——大田才次郎編，瀬田貞二解説』p. 359。
 - 14) 同上, p. 360。
 - 15) 同上, p. 3。
 - 16) 同上, p. 4。
 - 17) 同上, p. 347。
 - 18) 1885（明治18）年東京に生まれる。東京外語及び早大に学んだ後，旧東京日日新聞社を経て東京朝日新聞社に入社。在職20数年，横浜支局長，運動部長，同顧問を歴任。アサヒスポーツの編集に携わることで16年。この間1927（昭和2）年特派員として欧州諸国にあり，運動体育並びにその施設，組織機構等を視察し，1930（昭和5）年帰朝する。著書として朝日講座『スポーツの話』他。（小高吉三郎『日本の遊戯』の著者略歴より）
 - 19) 小高吉三郎『日本の遊戯』羽田書店，1943年。
 - 20) 小高吉三郎『日本の遊戯〔復刻版〕』拓本堂出版社，1976年，（序に代えて）pp. 2-3。
 - 21) 同上，（凡例）p. 1。
 - 22) 明治時代に生まれる。風俗及び童戯の研究を続ける。（酒井欣『童戯』玄光社，1944年より）
 - 23) 酒井欣『童戯』玄光社，1944年。
 - 24) 同上, p. 11。
 - 25) 1908（明治41）年大分県に生まれる。大阪第一師範学校教授，日本文学報国会員。主な著書は民謡詩集『山の彷徨の唄』（泰文館），『石蟹の唄』（民謡レビュー社）他。（前田勇『児戯叢考』弘文社，1944年より）
 - 26) 前田勇『児戯叢考』弘文社，1944年，pp. 1-2。
 - 27) 同上, pp. 1-2。